



1930年代ジャワ華人社会のリーダー像 : タン・ホン・ブンの『名士録』スマランの項より(前篇)

貞好, 康志

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 48:129*-145*

(Issue Date)

2017-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009889>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009889>



1930年代ジャワ華人社会のリーダー像 —タン・ホン・ブンの『名士録』 スマランの項より（前篇）—

貞 好 康 志

はじめに

本稿は、オランダ植民地期のインドネシア（当時の呼称はオランダ領東インド。以下、単に東インドと呼ぶこともある）で、1935年に出版された華人（orang Tionghoa、中国系移民と子孫の総称）の名士録を元に、当時の華人コミュニティの諸相を「指導者層がどのような人々であったか」という側面から探ろうとするものである。

中部ジャワのソロ（Solo）で出版されたこの名士録（原題は*Orang-orang Tionghoa jang Terkemuka di Java*, 『ジャワにおける著名な華人たち』）は、編纂の中心人物タン・ホン・ブン（Tan Hong Boen, 漢字表記は陳豊文, 1905年生まれ～1983年没）の名と共に、インドネシア初の本格的な華人名士録として研究者の間では広く知られてきた。また、当時の華人などの間でも実用的に用いられたと推測される。しかし、特定の人物の参照に使われることがあっても、この名士録を全体として考察の対象とする研究はこれまでなかった。

タン・ホン・ブンの名士録は、東インド植民地の政治や経済の中心であったジャワに限定されるとはいえ、収録された人物の数は、86都市872名にのぼる。これら全てを分析対象とすることは膨大な作業になるので、今回は手始めに、中部ジャワ州都スマラン（Semarang）の項に挙げられた30名に絞って考察したい。スマランに絞るのは次の理由による。

ジャワの代表的な地方都市の一つであるスマランについては、タン・ホン・ブンの名士録にやや先立つ1933年に地元の華人ジャーナリスト、リム・チアン・ユ（Liem Thian Joe）が刊行した同時代までの史書『スマランの歴史』[Liem 1933] や、インドネシア独立後の1950年代半ばにカナダの研究者ウイ

ルモットが行った社会学的調査の成果『スマランの華人』[Willmott 1960]をはじめ少なからぬ史資料が存在する。また1990年代以降は、筆者自身が2度の長期滞在(1990~1991年、1996~1998年)と10回ほどの短期訪問調査を行って文献・口述資料を収集してきた。これらをうまく組み合わせれば、やがて近現代を中心とする百年スケールの華人社会史、さらに華人を重要な一部分とする都市社会史を書けるかもしれない。ジャワの一都市の社会史を濃密に描くことで、インドネシアや東南アジア、さらに世界の近現代史に新たな光を当てられるかもしれない。スマランはそうした展望が望める、ジャワのみならず、インドネシア全体でも(主に資料の面で)稀少な地方都市の一つなのである。

以下、本稿は次のような手順で書き進めてゆきたい。まず第一節で、この名士録が世に出た1930年代の東インドがどのような社会状況におかれていたのか、華人コミュニティに関連する事柄を中心に概観しておく。あわせて、タン・ホン・ブンという人物およびこの名士録全体の構成や特徴について分析する。資料批判と言い換えてもよい。第二節では「スマランの名士」として挙げられた上述30名について、出生地や教育歴と文化背景、社会的事績などを中心に順にみてゆく。第三節で、それらを全体としてみた時に浮かび上がってくる事柄を整理し、考察を加える。最後に結論と残る課題を述べる。

なお、紙幅の都合上、本稿を前篇と後篇に分ける。前篇では、第二節の半分、対象30人中15人目までの分析を行うことにする。

第一節. 時代の概観、資料の特徴

1930年代中葉という時代

タン・ホン・ブンの名士録が出版された1930年代中葉は、世界史的に見れば二つの世界大戦のいわゆる戦間期後半だが、1929年に始まる世界恐慌がアジア諸国や植民地にも波及して数年、それを一つの要因としながら再び大きな戦争へ向かってゆく時代といえるであろう。

東インドに関していえば、1910年代に現在のインドネシアの領域につながる広大な地域がオランダの植民地支配下に入り、その後の法律や諸制度の整備

を経て植民地国家「オランダ領東インド」がいちおうの完成をみたのが1930年代だったといつてよからう。中央・地方の行政制度も1900年代以来のいわゆる倫理政策を背景に「オランダから東インドへ、中央から地方へ」の分権化がそれ以前よりは進み、中央においては総督の諮問機関とはいえ住民代表議会の体裁を備えたフォルクスラート（Volksraad）が1918年バタビアに開設されている。1920年代には西ジャワ、中部ジャワ、東ジャワのジャワ三州が発足し、これらの州や主要な都市に地方議会も置かれている¹。

東インドの住民は、オランダ人をはじめとする「ヨーロッパ人（Europeanen）」以外に「原住民（Inlanders）」と「外来東洋人（Vreemde Oosterlingen）」という鼎立する三大カテゴリーに区分され、華人（Chineezzen）は外来東洋人中の最大グループをなした。20世紀初めから、華人や原住民の間では植民地支配下に置かれた自分たちの地位向上やそのための相互扶助を図る政治・社会運動が興り、1930年代までに様々な展開をみた²。

原住民の間では1910年代にイスラーム同盟（SI）、1920年代前半にはこれに代わる形でインドネシア共産党（PKI）、20年代後半にはインドネシア国民党（PNI）が勢力を拡大したが、PKIは1926～7年の武装蜂起に失敗して壊滅、PNIも党首スカルノ（Sukarno）ら指導者が次々に逮捕・投獄され、1935年までには閉塞状況に陥っていた。

華人コミュニティについていえば、1900年バタビアに初めて開設された中華会館（Tiong Hwa Hwee Kwan, THHK）と付設の学校（中華学堂、THHT）がジャワを中心に全土で展開した³。THHKは儒教の振興や華語（北京官話）による教育に重きを置いたが、華人社会の近代化と団結を通じて植民地における華人の地位向上を目指した組織だった。1910年代にはオランダ植民地当局の文教政策の一環として、華人子弟向けのオランダ式小学校（Hollandsch Chineesche School, HCS）が主だった都市に設置され、THHKの学校と対抗した。これら学校制度の拡充と相乗的に伸長したのが、新聞・雑誌などの商業活字出版とジャーナリズムの発展である。華人のジャーナリズムは華人社会の近代化と地位向上を謳う点では、総じて中華会館の運動と軌を一にしていた。だが、新聞・雑誌を主なメディアとする華人の運動は、政治志向という点

では1930年代前半までに大きく三つの方向に分岐していた。

一つは自分たちが「中国人」であることを再確認し、とりわけ辛亥革命以降は、中華民国との結びつきを強めようとする「中国志向」である。この志向は、バタビアに創刊された日刊紙『シンポー（Sin Po、中身はマレー語だが題字には漢字の「新報」を併記）』に代表され、新報派とも呼ばれた。1920年代に入ると上述したオランダ式教育を受けた層を中心にオランダ志向、もしくは中国でなく東インドを自分たちの人生の舞台と考える「東インド志向」が発展した。1928年に結成されたチュン・フア・フイ（Chung Hwa Hui、漢字表記で表記すれば中華会だが、通常アルファベットでCHHと呼称）はこの志向の政治組織面における表れだった。さらに1932年、CHHから分派した一部の人がインドネシア華人党（Partai Tionghoa Indonesia、略称PTI）を結成した。PTIは東インドをやがて独立国家インドネシアとすることを目指すスカルノらのナショナリズム運動に歩調を合わせ、華人もその運動に参入すべし、この地で生まれた華人はインドネシア民族の一員である、という「インドネシア志向」を主張する政党であった⁴。

1930年センサスにみるスマラン／ジャワ華人社会の概要

植民地政府によって実施された1930年度の国勢調査に拠って、当時のオランダ領東インドにおける華人人口の概況をみておこう⁵。

この年、東インド全体で華人とされる住民人口は総計で123万3,214人、総人口約4,172万人の約2.9%を占めていた。そのうち、広義のジャワ（ジャワ島と東部に隣接するマドゥラ島を合わせた地域）に58万2,431人、いわゆる外島（スマトラ、ボルネオ、セレベスなどジャワ以外の地域）に65万783人が分布していた。華人の多い都市としては、首都バタビアが71,688人で最多、東ジャワ州都のスラバヤが38,871人で2位、中部ジャワ州都スマランは27,423人で3位であった。ちなみに4位に北スマトラ州都メダンの27,287人、5位は西ジャワ州都バンドゥンの16,657人と続く。

スマランの華人について性別の内訳をみると、男性が14,828人（54%）、女性が12,595人（46%）であった。ちなみにジャワ全体だと男性が319,911人

(55%)、女性が262,500人(45%)だったので、いずれも男性がやや多い比率に変わりないと言えるだろう。

スマランの華人のうち、外国生まれの者(移民一世)は5,042人で全体の19%、本人は東インド生まれだが父親が外国生まれの者(移民二世)は5,536人(20%)、父親も東インド生まれ(移民三世以上)が16,317人(61%)であった。ジャワ全体だと一世、二世、三世以上がそれぞれ20%、15%、64%であったから、これも大差ないといってよい。

スマラン華人のうち、職業に就いている者の分布をその分野別にみると、農業などの一次産業が1.2%、製造業が29%、運輸業が4%、商業が54%、自由業が3.3%、公務員が0.1%、その他が7.4%であった。

10才以上の者の識字率についてジャワ在住の華人全体でみると、男性は東インド生まれが64.6%、外国生まれが58.4%であったのに対し、女性は東インド生まれが24.3%、外国生まれは9.3%であった。男性に比べ女性の識字率がかなり低く、男女ともに外国生まれ(移民一世)の場合はいっそう低かったことが見て取れるだろう。

タン・ホン・ブンと名士録について

名士録の編者タン・ホン・ブンの人物について、スリヤディナタおよびセチャウタマの華人人名録〔それぞれP-3およびP-4〕に拠ってみておこう。彼は1905年に中部ジャワの町スラウィ(Slawi)で生まれた。スラウィと海岸部の町トゥガル(Tegal)の中華学堂(THHT)で学んだほかは独学であったらしい。1920年代半ばごろスマランに月刊小説雑誌『ブラン・プルナマ(Boelan Poernama)』を創刊。以降バンドゥン、スラバヤほかジャワ各地を遍歴しながら自ら発行する雑誌に小説を発表し続けた。本の形になったものだけでも生涯(～1983年没)で50冊を超えるなどかなりの多作であった。その中にはスカルノの伝記としてはおそらく最初の作品とされる『人間としてのスカルノ技師(Ir. Soekarno Sebagai Manoesia)』も含まれている⁶。このほか、ジャワ的な神秘主義に傾斜した作品もあったという。ジャワ貴族の名とみえるKi Hadjar Soekowijono、女性をかたったMadame de' Eden Lovelyなど多くの

筆名を用い、またその作風も多彩であったことから、インドネシア文学者のミラ・シダルタ (Myra Sidharta) はタンのことを「千の顔をもつ作家」と評している [P-4: 358]。

そのタンを編集者とする『名士録』は、前述の通り、86都市872名の人物をカバーしている。記述のはしばしに、タンが直接本人にインタビューしたらしい表現や以前から面識があったらしい記述も登場する。が、872名全員に会ったとは考えにくく、出版元である“Biographical Publishing Centre”の名にも窺えるように、何らかの組織的な（例えばジャワ全土に広がる中華会館 THHK のネットワークを利用するなどの）情報収集を行なったのではないかと推測される。

『名士録』の特徴の一つは、掲載された全員が存命中の人物だということである。これは一面で、この名士録の記述上の制約条件になったであろう。本人や関係者が生きており、当該箇所を読む可能性を考慮すれば、あからさまな批判などネガティブな記述は憚られたろうからである。タンが（別時代の、外国の）研究者ではなく、掲載された有力者たちの率いる（同時代の、同じジャワの）華人社会に相当程度依存する一作家、一生活者だったことを考慮すればなおさらである。だが反面、名士たち本人や同時代の華人社会全体の眼に晒されているということは、生きた情報に基づく正確な記述として比較的信頼できる、という側面もあるだろう（現にゲラもしくは一刷の段階で指摘された、何人かの学位号や親族関係についての訂正が巻末に付記されている）⁷。

もう一つ、この名士録の体裁上の最大の特徴は、872名の人物がアルファベットなどの順序でなく、86の「都市別」に掲載されていることである。つまり、どの人物も「バタビアの誰それ」とか、「スマランの誰々」として並べられている（しかも巻末インデックスがない）ので、いま特定の人物を検索しようとするとは非常に不便である⁸。一体なぜタンの名士録がこのような編集体裁をとったのか、その意味については、まず第二節で具体的な人物描写をみたあと、第三節「分析」の箇所でも考察したい。

第二節. 1930年代スマランの名士たち（前半）

それではタン・ホン・プンの名士録スマランの項（全16頁）に収められた30名の人物たちに関する記述をみてゆこう。生年と生地については明記されている人と書かれていない人がいるが、後者について、[P-3]、[P-4]など他の資料で判明するものはそれで補うことにする。

（1）ベー・ティアット・チョン技師（Ir. Be Tiat Tjong）

1889年スマラン生まれ。はじめマグラン [Magelang、中部ジャワの町、筆者註] のヨーロッパ人向け初等学校（ELS）で学び、その後スマランのELSへ転校、さらにスマランのオランダ式高等学校（HBS）へ進学。卒業後、オランダへ渡り、デルフトの工科大学校に入学、そこで技師（Ir.）の学位を得る。東インドへ帰国しスマランへ戻った当初はベー・ビアウ・チュアン銀行に勤めたが、その後スマラン市議会の華人代表議員となった。オランダ中華会の設立者の一人であり、1922-23年度には会長を務めた。

（2）チャン・コック・チェン氏（Toeàn Chan Kok Cheng）

1893年、シンガポール生まれ。ラッフルズ・スクールで学び、15才の時 [1908年ごろ] スマランへ移住する。商業に従事しながら英語やオランダ語を独学。20才の時 [1913年ごろ] 渡英し、ロンドン経済学校とロンドン大学で学ぶ。さらにオランダへ移り語学を磨いた。スマランへ戻ってからは最初商業に従事するが、ジャーナリズムの世界へ転じる。スラバヤの『スアラ・プブリク』（Soeara Publiek）紙、バンドゥンのシン・ビン（Sin Bin）紙を経て、スマランの『ジャワ・トゥング・レビュー（Djawa Tengah Review）』誌の主筆となる。氏は新マルサス主義の信奉者であり、*Birth Control* という著書もある。

（3）ジー・ティン・リアット氏（Toeàn Djie Ting Liat）

東ジャワの町ンガンジュック（Ngandoek）生まれ。スラバヤのオランダ式学校（BroedersschoolおよびM.T.S）で教育を受けた後、オランダのハーグで

会計士になるための勉強をする。アムステルダムの商科大学校で学び、卒業後、働きながら同地で会社勤務の傍ら会計士の資格を得る。1927年ジャワへ戻り、黄仲涵財閥（Oei Tjong Ham Concern, OTHC）に勤める。会計係長を経て現在、財務部長。中華民国政府によって在東インドの貿易委員に任命される。最近「学習啓発のためのビューロー（Bureau voor Studie-Voorlichting）」を設立し、当地の華人の経済や生活に関する議論をするための会合を主催している。

（4）グイ・イン・ホン夫人（Njonjah Goei Ing Hong）

1883年スマラン生まれ。生来の名はベー・スン・ニオ、サラティガ（スマラン南郊の町）のマヨール、ベー・クワット・クン（Be Kwat Koen）の長女である⁹。ソロのヨーロッパ人向け小学校（ELS）で3年生まで学ぶ。社会・慈善活動（Siahwee）に身を投じた最初の華人女性の一人である。幼児に関する相談所（Consoltatie Bureau）を設立し、資金も自ら出した。華人診療所の後援者にして、社会文化団体ジンギレーティシン（Djien Gie Lee Tie Sin、漢字表記すれば仁義礼智信）の名誉会員でもある。後者においては婦人部を設立した。婦人部は今では中華婦女会（Chung Hua Fu Nie Hui）として独立している。中華会館では手芸部創設者の一人。また、スマランの夜市（Pasar Malam）の常任出資者の一人でもある。主婦協会（Huisvrouwen）の元理事も務め、サラティガ中華会館のパトロンでもある。前述の幼児相談所に亡夫グイ・イン・ホンの名をつけ記念としたのは、貞節な妻からの何よりの贈り物といえるであろう。

（5）ハン・ティアウ・チョン博士・技師（Dr. Ir. Han Tiauw Tjong）

1894年、東ジャワのプロボリング（Probolinggo）生まれ。最初、東ジャワの町クラクサンのオランダ私設学校で学ぶ。次いでスラバヤのブイズ・インスティテュート（Instituut Buys）などを経て同地のオランダ式高等学校（HBS）に入学、途中でオランダに渡りユトレヒトのHBSを卒業する。その後、デルフトの工科大学校で機械工学技士の学位を得、さらに「中国の産業

化」という論文で博士号を取得する。東インド帰国後、アチエを経てしばらく首都バタビアに住む。この時に1924-27年にわたってフォルクスラートの華人代表議員を務めた。現在は中部ジャワ州議会の代表議員である。1924年以降はバンドゥン工科高等学校の理事。かつてオランダ中華会の会長を務め、現在は名誉会員。ジャワの中華会（CHH）においても設立者の一人であり、現在は中央執行部メンバー兼、中部ジャワ支部の支部長でもある。

(6) クー・イック・リアット氏 (Toe an Koe Ik Liat)

スマラン生まれ〔現在既に70才、とあるから1865年頃の生まれと推測される〕、福建語の学校 (sekola Hok Kian) で学ぶ。かつて10年間、名誉ルーテナント (Luitenant tituler) を務める。現在は「栄えある公務に尽くした者への金星勲章」をもつ名誉カピテン (Kapitein titular)¹⁰。社会活動としては、かつて葬祭扶助団体「文献堂 (Boen Hian Tong)」の理事や相互扶助基金会 (Harta Pertoelangan) の会長を務めた。

(7) コー・チャイ・シン法学修士 (Mr. Ko Tjay Sing)

1903年マグラン生まれ。同地のオランダ私学校、修道院付属学校、中華学堂 (THHT) を経てオランダ式華人学校 (HCS) に学ぶ。さらにスマランのオランダ式高等学校 (HBS)、バタビアの法科大学校で学んだ後、オランダへ渡り、ライデン大学で法学修士に合格する。東インドへ帰国後、一年間バタビアでサルトノ法学修士¹¹と共に働いた後、スマランへ戻り法律事務所開設。バタビア在住時はChung Shiohの指導部メンバーだった。現在はスマランのインドネシア華人党 (PTI) の執行部メンバーである。

(8) コー・ホン・アン氏 (Toe an Ko Hong An)

日刊『中部ジャワ (Djawa Tengah) 』および月刊『中部ジャワ・レビュー (Djawa Tengah Review) 』の社主。中部ジャワのマグラン生まれ。スマランのオランダ式小学校 (ELS) と同高等学校 (HBS) を卒業後、オランダへ渡る。ロッテルダム商科学校で学ぶ。イギリスへ移り一年間ロンドン在住、さら

にベルリンで半年、パリで半年過ごした後、ジャワへ戻る。華人社会においては、特にサッカーなどスポーツ分野で貢献が大きい。ホア・ナン〔華南?〕サッカー連盟などの名誉会長。スラバヤに住んでいたこともあり、その時はベー・ピアウ・チュアン銀行のエージェントのほか、同市議会議員、ダルモ病院理事なども務めた。スマランでは現在、サッカー連盟の副会長、スマラン・スタジアムの運営委員、社会团体サン・バン・ヒン (Sam Ban Hien) の顧問を務めている。

(9) コー・クワット・ティオン法学修士 (Mr. Ko Kwat Tiong)¹²

1896年中部ジャワのパラカン (Parakan) 生まれ。最初マグランのヨーロッパ人向け小学校 (ELS)、次いでスラバヤ〔正しくはスマラン〕のオランダ式高等学校 (HBS) で学んだ。オランダで学業を続けたかったが1914年に欧州大戦勃発のため延期を余儀なくされた。そこでジョグジャカルタへ移り、『パリタ (Palita)』紙の編集部で働き、その後オランダ企業のエスコンプト (Escompt) や郵便局に勤め、やがてマグランで実兄コー・クワット・イ氏 (Toe an Ko Kwat Ie) の携わるタバコ業界でも働いた。1920年に至ってようやく念願のオランダへ渡り、ライデン大学を法学修士として卒業した。ジャワに戻った後、当初スマランではヤウ・ケンホン法学修士 (Mr. Yauw Keng Hong) と、その後スマラン、ジョグジャカルタ、トゥガル (Tegal) でブサル法学修士 (Mr. Besar) と法律事務所を共同経営した。ジョグジャカルタ時代から多くの運動に関わり社会貢献は大であったが、最近ではインドネシア華人民党 (PTI) がスラバヤで誕生した時、すぐに共感の意を示してスマランで支部を作った。その後、同党の中央執行部議長となり、現在では同党を代表してフォルクスラートの議員となっている。

(10) クウェー・チャム・チン氏 (Toean Kwee Thiam Tjing)¹³

1900年東ジャワのパスルアン (Pasoeroean) 生まれ。マラン (Malang) のヨーロッパ人向け小学校 (ELS)、次いでオランダ式中等学校 (Mulo) に在学したほか、プライベート・レッスンや独学で多くのことを学んだ。早くか

ら新聞業界で修行を始め、バンドゥンの『ライ・ポー (Lay Po)』で頭角を現した。スラバヤの『スアラ・プブリク (Soeara Publik)』ではこれを率いるリム・クン・ヒェン氏と共に9度の筆禍事件を起こし、10ヶ月の服役も経験している。同じスラバヤでリム氏と共に現在の『シン・ティッ・ポー (Sin Tit Po)』紙に移ってからは、いっそう政治運動に身を投じ、インドネシア華人党 (PTI) の名だたる闘士の一人として知られた。その後、東ジャワのジュンベル (Djember) で『ブンブリタ (Pemberita)』紙を創刊し率いたが、廃刊に追い込まれ、現在はスマランの『マタハリ (Mata Hari)』紙のスタッフとなっている。

(11) クウェー・ヒン・チャット氏 (Toeàn Kwee Hing Tjiat)

1891年スラバヤ生まれ。日刊『マタハリ』編集主幹。鋭い筆鋒で知られた高名なジャーナリスト。かつてスラバヤの『ボクトク (Bok Tok)』、『チュンチウ (Tjoen Tjioe)』、『アジア (Asia)』の各紙、ジョグジャカルタの『パリタ (Palita)』紙を率いた後、バタビアの『シンポー』紙に招かれて主筆となった。その後東ジャワの某大企業の代理人として中国、日本、欧州を歴訪。ベルリン滞在時、有名な風刺書『二人の石頭 (Doea Kepala Batoe)』を出版した。東インドに戻ろうとした1923年、当局に拒否されたため、中国へ赴き、10年余り上海に住んだ。1930年代になってからオランダ東インド当局の許可が下りたので当地へ帰国、その際保証人となったウィ・ティオン・ハム財閥 (Oei Tiong Ham Concern, OTHC)¹⁴の資金で『マタハリ』紙を発刊することになった。

(12) リー・ピン・アン氏 (Toeàn Lie Ping An)

スマラン生まれで華人向けオランダ式学校 (HCS) 卒業。かつては書籍商『進歩 (Kamadjoean)』社の幹部で、今はなくなった月刊『進歩』誌の編集・出版者だった。社会活動にも多く関わり、ブラウエ・ダス (De Blauwe Das) [「青いネクタイ」を意味する西洋式の社会団体と思われるが不詳。Ti ong Hoa Kiong Hoo Hwee、さらにShiong Tih Hui 兄弟会と改名したらしい]

の執行部員を務めたほか、中華会（CHH）にも参加した。現在は華人の相互扶助団体「インドー・ティオンホア（Indo Tionghoa）」の役員も務めている。

(13) リム・ボー・スウィー氏（Toeian Liem Bo Swie）

中部ジャワのルンバン（Rembang）で生まれ、14才の時にスマランへ移る。相互扶助団体インドー・ティオンホアおよび華友会館（Hwa Yoe Hwee Kwan）の会長。多くの政治・社会運動に関与し、抗日救国支援団体のKioe Kok Hoo Wan Hweeなど〔中国〕ナショナリズム運動の組織も含まれる。幼い頃の徒弟奉公から身を起こし、今ではスマランで有名な金・宝石商「リム・ボー・スウィー」を経営する。

(14) リム・ティアム・ユ氏（Toeian Liem Thiam Joe）

1895年中部ジャワのパラカン生まれ。最初〔原住民子弟と机を並べる〕マレー語およびジャワ語学校に学ぶ。氏がこれらの言葉に堪能なのはそのためである。その後福建学校へ、さらに中部ジャワ・ンガディレジョ（Ngadiredjo）の中華学堂へ移った。氏はまた多少のオランダ語の手ほどきも受けた。ンガディレジョで商いの世界に入ったが性分に合わなかったようである。彼は文章を書くことが好きで、学校にいた時分から『ワルナ・ワルタ（Warna Warta）』紙や『プルニアガアン（P e r n i a g a a n）』紙の補助員をしていた。やがてスマランへ移り『ワルナ・ワルタ』本社で勤めるようになった。その後『中部ジャワ（Djawa Tengah）』へ移籍し、月刊『中部ジャワ・レビュー』と兼務の編集部員として今日に至る。

(15) ウィ・チョン・ハウ氏（Toeian Oei Tjong Hauw）

1905年スマラン生まれ。オランダ式高等学校（HBS）卒業。亡きマヨール、ウィ・ティオン・ハムの息子であり、サラティガのマヨール、ベー・クワット・クンの娘婿でもある。社会組織に表立って名を出すことをしないが、実のところ、蔭でおおいに支えているのである。援助金を要するようなあらゆる

る運動を支援するのにためらうところがない。現在は父の後を継いで黄仲涵財閥の総帥となり、世界中にその名を轟かせている。この地で生まれた氏はスマラン華人社会の誇りとするところである。

(前篇はここまで。後半の15名と全体の分析は続篇にゆずる)

註

- 1 以下、20世紀初めのオランダ領東インドの一般動向については貞好 [2016] の第1章に詳しい。
- 2 東インドで印欧人 (Indo-Europeanen) と呼ばれたいわゆる欧亜混血人の政治・社会運動は、華人や原住民の運動に先駆け、19世紀末に現れた。
- 3 中華会館の運動に関する原資料として Nio [1940] を参照。
- 4 以上については、貞好 [2016] の第1、2章に詳しい。
- 5 以下、G-2 および G3 に拠る。
- 6 このスカルノ伝は華人名士録と同じ1935年に出版されている。なお、これに先立つ1932年、タンは植民地当局によってスカルノと共にバンドゥンで逮捕・投獄されたという [P-4: 358]。スカルノの逮捕・投獄は2回目で史実である。タンは何らかの筆禍で連座したと推察されるが詳らかでない。
- 7 [P-1: 237]。なお、奥付に刷数が記されていないため、筆者の参照した原典が第何刷かは不明である。
- 8 この不便を解消することを目的に、わが国の柏村彰夫氏がアルファベット順のインデックスを作成し、関係者に配布してくださった [柏村1990頃]。本稿を書く上でも非常に有用であった。記して感謝する。
- 9 マヨール (Majoer) とはオランダ植民地当局によって任命された華人コミュニティの頭目のうち、筆頭の称号である。
- 10 カピテンは註9で触れたマヨールに次ぐ第二位の、ルーテナントは第三位の頭目の称号である。これらについては後篇の本文で再述するつもりである。
- 11 サルトノ (Sartono) はインドネシア国民党 PNI でもスカルノに次ぐ指導者として活躍した、ジャワ人の著名なナショナリスト。
- 12 コー・クワット・ティオンについては、貞好 [2016] 第二章の主人公としてその生涯を詳しく描いた。
- 13 彼はチャムブック・ブルドゥリ (『棘の鞭』の意) という筆名でも知られたジャーナリスト、作家である。近年その事蹟が再評価され、[Tjamboek 1947 (2004)], [Kwee 2010] の形で復刻されるなどしている。
- 14 スマランに本拠を置いた黄仲涵財閥 (OTHG) については、さしあたり Liem [1979], Yoshihara [1989] などを参照。

言及・引用（後篇については予定）文献

【オランダ植民地政府文書】

G-1 *Regerings-Almanak voor Nederlandsch-Indië* 1878, 1877, Landsdrukkerij.

G-2 *Volkstelling 1930 Deel VII: Chineez en andere Vreemde Oosterlingen in Nederlands-Indië*, 1935, Batavia: Department van Economische Zaken.

G-3 *Volkstelling 1930 . Deel VIII: Overzicht voor Nederlandsch-Indië*, 1936, Batavia: Department van Economische Zaken.

【名士録・人名録】

P-1 Tan Hong Boen ed., 1935, *Orang-orang Tionghoa jang terkemoeka di Java*, Solo: Biographical Publishing Centre.

P-2 Gunseikanbu, 1986 *Orang Indonesia yang terkemuka di Jawa*. Yogyakarta: Gajah Mada University Press. （日本の軍政監部編纂によるジャワ地域の名士録の復刻版）

P-3 Suryadinata, Leo, 1995, *Prominent Indonesian Chinese: Biographical Sketches*, ISEAS.

P-4 Setyautama, Sam, ed., 2008, *Tokoh-tokoh Etnis Tionghoa di Indonesia*（『印尼華族名人集』）, Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia.

【定期刊行物（新聞・雑誌）】

Djawa Tengah [日刊、発行地Semarang] , 1931-1932.

Djawa Tengah Review [月刊、Semarang] , 1928-1935.

【研究書・論文・一般著作物など】

Cator, W. J., 1936, *The Economic Position of the Chinese in the Netherlands Indies*, Oxford: Basil Blackwell.

Coppel, Charles A., 1973, "Mapping the Peranakan Chinese in Indonesia" , *Far Eastern History*, 8.

Furnivall, J. S., 1939 (reprinted in 1967) , *Netherlands India: A Study of Plural Economy*, Cambridge University Press.

Kwee Thiam Tjing, 2010 (Ed. by Djati, Arief W. & Ben Anderson) , *Menjadi Tjamboek Berdoeri: Memoar Kwee Thiam Tjing*, Jakarta: Komunitas Bambu.

Liem, Thian Joe, 1933, *Riwajat Semarang: Dari Djamannja Sam Poo Sampe Terhapesnya Kong koan*, Semarang & Batavia: Ho Kim Yoe.

Liem, Tjwan Ling, 1979, *Raja Gula Oei Tiong Ham*, Surabaya: Liem Tjwan Ling.

Nio, Joe Lan, 1940, *Riwajat 40-Taon dari Tiong Hoa Hwee Koan Batavia 1900-1939*, Batavia: THHK.

Suryadinata, Leo, 1978, "The search for Identity of a peranakan Chinese: A Political Biography of Liem Koen Hian." in his *The Chinese Minority in Indonesia: Seven Papers*, Singapore: Chopmen Enterprises.

—, 1990, *Mencari Identitas Nasional: Dari Djoe Bou San sampai Yap Thiam Hien*, Jakarta: LP3ES.

—, 2005, *Pemikiran Politik Etnis Tionghoa Indonesia: 1900-2002*, Jakarta: LP3ES.

Tiong Hwa Siang Hwee, 1937, *Boekoe Peringatan 1907-1937 Tiong Hwa Siang Hwee*

Semarang, Semarang.

Tjamboek Berdoeri (Kwee thiam Tjing) , 1947 (republished in 2004 by the edition of Stanley & Arief W. Djati) , *Indonesia dalem Api dan Bara*, Jakarta: ELKASA.

Willmott, Donald E., 1960, *The Chinese of Semarang: A Changing Minority Community in Indonesia*, Ithaca: Cornell University Press.

Yoshihara Kunio, ed., 1989, *Oei Tiong Ham Concern: The First Business Empire of Southeast Asia*. Kyoto: The Centre of Southeast Asian Studies, Kyoto University.

石井米雄（監修）, 1991, 『インドネシアの事典』同朋舎.

柏村彰夫, 1990頃, index for Tan [1935] . 未出版ワープロコピー.

貞好康志, 2002, 「ジャワ華人の統計的プロフィール—200人の社会・文化的傾向」『国際文化学』第7号.

一, 2016, 『華人のインドネシア現代史—はるかな国民統合への道』木犀社.

ジャワ新聞社, 1944（復刻版1973）, 『昭和19年ジャワ年鑑』ビブリオ.

白石隆, 1987, 「アヘン王、砂糖王、チュコン—インドネシアにおける華僑財閥の系譜」東南アジア研究会編『社会科学と東南アジア』勁草書房.

増田与, 1971, 『インドネシア現代史』中央公論社.

満鉄東亜経済調査局, 1940（1986年復刻版）『インドネシアにおける華僑』青史社.

Profiles of Chinese Social Leaders in 1930' s Java: Semarang' s case seen in Who' s Who by Tan Hong Boen (Part 1)

Yasushi SADAYOSHI

This paper analyses the first “Who’ s Who” book of Chinese in Java, then a central part of Dutch colony, Netherlands East India, published in 1935. Covering as many as 872 notable persons throughout 86 cities and towns, this book can be used as a useful source to get insights into various aspects of Indonesian society of that age from the viewpoint of leadership in Chinese community. At the outset, this paper focuses on 30 persons who appears as notable figures in Semarang, the principal city of Central Java, with a prospect to write a social history of the city’ s modern age.

Part 1 firstly review the general situation of the Netherlands East India and Chinese community since the dawn of 20th century until the mid-1930s. Then this author make a brief introduction of the main editor of “Who’ s Who” book, Tan Hong Boen (1905 ~ 1983) , a Java-born Chinese journalist and novelist, who was called “ a writer with a thousand faces” . The author also makes some criticism on the book. One of them are about advantage (relative accuracy and vividness) and disadvantage (possible restraint) as a “Who’ s Who” book treating influential persons still living in the same age with the editor and the publisher.

Among 30 leading persons of Semarang, this part depicts 15 persons. They are the entrepreneurs, merchants, staff of big farms, advocates, journalists, relatives of traditional community leaders (Chinese officers such as *Majoor*, *Kapitein*) , and at the same time leaders of social or political organizations. Part 1 devotes to description of their birth places, educational backgrounds, life careers and achievements, etc., which made them as Chinese community leaders of their age, according to Tan Hong Boen’ s book. Deeper analysis will

be made in Part 2, after reviewing another 15 persons' profiles.

(Continues to Part 2, to be published in the next volume)

Keywords : Chinese in Java, Colonial Indonesia, Social leadership, Semarang

キーワード: ジャワ華人、植民地期インドネシア、社会指導者、スマラン